

## 仮囲いに並んだ笑顔の写真

### Merry in KOBE 2002



アルホワイトベースの仮囲いの設置は前年サブで決ったから、小さなサイズで数を揃えただけ、そのため、これだけの枚数のパネルを貼る作業も1日で終わってしまふ。「ディテールや色の再現性が高い」と、写真そのものが強く見えます。水谷さん。ちなみに使っている顔料インクは写真シートと同じものだが、張りまく写真に強いプリントが可能なプリンター(400dpi)、グラブプリを使うこと、写真に強いフォトクラフト社の技術力が再現性をさらに高めている。経緯では、アルホワイトベースは印刷、人集などに活用する写真ブランドが写真を貼った仮囲いを行う際に使われるケースが多々あるという。また、素材として軽く、作業がしやすいため、仮囲いのメカウエブの入口に掛けられているジョイントコースターのたまたま図のように、仮囲いのところに活用するものにも使われることが多い。

今年の3月25日、神戸の新長田南再開発地区の工事現場の仮囲いに22枚の笑顔の写真が登場した。これはアートディレクターの水谷孝次さんが3年前から続けているMerryプロジェクトの一環として行われているもの。Merry(幸福)とは、希望に満ちた「笑顔」に新しい時代へのエネルギーを見出す、という考えで、水谷さんは国内外で笑顔の写真を取り続け、ポスターや本など様々な形で発表してきた。昨年9月には「神戸21世紀・復興記念事業」の一環として「Merry in KOBE 2001」が開催された。そして、ワールドカップで神戸を訪れる人を笑顔のポスターで迎えようという「Merry in KOBE 2002」を進める中で、ひょんなことから始まったのが、この仮囲いの企画だった。「きっかけは、この地区の開発を手がけている鹿島建設の人を撮影したことから。何度か撮影で工事現場に足を運んでいるうちに、Merryをととても気に入ってくれて、このエリアをMerryで飾ったらどうかという話になったんです。以前に仮囲いという媒体を使ってMerryをやることを提案していたし、アートやデザインが

もっとパブリックな場所であれば面白いと思っていたので、神戸市にもぜひやらせてほしいという話をしました」(水谷孝次さん)

そして、当初決まっていたプランを一部だけ残して、54.5mにも及ぶ腕塚線の仮囲いにMerryが掲出されることになった。ところが予算はない、しかも掲出する期間は長い。そんな状況の中で、写真のクオリティをどう保ち続けるかということが問題になった。その時にフォトクラフト社から提案されたのが、アルホワイトベースというアルミ板を使う方法。これは同社が開発したもので、日本に1台しかないプリンター、グラブプリを使い、顔料インクで出力したものをアルミ製のパネルに転写している。その再現性は高く、Merryでは35mmのポジを縦3m、横2.1mという大きさに伸ばしているにも関わらず、粗さは全く見えない。

「長期間に渡って掲出するものだし、人の顔が写っているので写真としてのクオリティを大切にしたい形でした。それで提案されたのが、アルミ板でした。これを使ったのはコスト面ではもちろん、耐光性と写真の

再現性が大きかったから。写真を普通のインクジェットプリンターで出力するとベタが強くて平面的になるけれど、これは色の深度が深く、写真のディテールも細く再現することができました」(水谷さん)

新長田は多くの人が亡くなった地区で、震災以後、人の流出も多く、街全体の活気が薄れていた。しかし、Merryの仮囲いが登場して話題を呼んだことで、見に来る人も増え、街に明るさが戻ってきたという。

「こうした仮囲いや屋外広告は表現の場として魅力を感じます。おそらく21世紀という時代は美術館の中でアートを見せたり、駅でただきれいなポスターを見せるのではなく、街中で見るとか、朝の光の中でコミュニケーションするようなことが大切になると思うんです。人と社会がもっと連携したものを出していかないと、誰も振り向かなくなってしまう。今回の試みは小さなことだけれど、これまでとは違う展開ができたかなと思います」(水谷さん)

新長田南再開発地区でのMerryは、再開が終了する2003年12月まで続く予定だ。